

## 知的障害者の暮らしの場の移行を取り巻く高齢期の親の意識

### —知的障害者家族へのインタビュー調査からの考察—

○佛教大学 氏名北村綾子 (10105)

池田倫子 (佛教大学・10218)、田中智子 (佛教大学・5114)、孔栄鐘 (佛教大学・9111)、久保雅子 (佛教大学・9907)

キーワード3つ：知的障害者・高齢期の親・暮らしの場の移行

#### 1. 研究目的

知的障害のある子どもの親が高齢期に差し掛かると、加齢に伴う体力的な衰えを実感し、今までと同じようなケアを行うことが徐々に難しくなり、親子での同居の暮らしが立ち行かなくなることは想像に難くない。ケアが立ち行かなるまで(親子同居のケアの閾値)のグラデーションはさまざまで、8050問題や老障介護といった言葉が表すように高齢期の親の同居のケアには課題がある。本調査においては、子どもの暮らしの場(施設、グループホーム、地域での一人暮らし等)の移行を希望しているにも関わらず、同居を継続している高齢期の親の意識を明らかにする。なお、本調査において高齢期は、65歳以上とする。

#### 2. 研究の視点および方法

知的障害のある子どもについて、時期を問わず生まれ育った暮らしの場への移行を希望しているにもかかわらず、同居を継続している家族の生活実態と意識を明らかにすることを目的としてインタビュー調査を実施。調査期間は2023年6月～8月。対象者の募集は、機縁法を用い、障害福祉サービス事業所及び家族会へ呼びかけて紹介を受けた。調査対象者は、療育手帳を有する子どもの暮らしの場の移行を希望している親(43名)。そのうち、65歳以上の15名を分析の対象とする。インタビュー内容は①現在の暮らし②暮らしの場の移行を考えるタイミング③希望する移行先について。分析は逐語録を作成して行った。

#### 3. 倫理的配慮

本調査については、佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号2023-2-B)。調査結果について、個人が特定できる情報は匿名化を行った。本報告は、共同研究者の承諾を得ており、報告者および共同研究者に開示すべきCOIはない。

#### 4. 研究結果

暮らしの場の移行を考えたが、結果的に同居が継続している現状に際しての親の意識について明らかになったのは以下のとおりである。

親の体調不良やしんどさの実感、身近な同じ高齢期の親が他界などを機に、暮らしの場

の移行を検討し、実際に情報収集や入居申し込みを始めると親は現実と向き合うことになる。希望したグループホーム（以下、「GH」という）が満員ですぐに入所できない、障害の特性などによっては入所できるGHが見つからない、終の棲家とならないGHの現状などを知ることになる。移行の準備として、練習のために始めたショートステイが人手不足で定期利用が難しいなどの事態がたちはだかる。GHや施設の入所までこぎつけても子どもが1回パニックになり1週間での退所、ケアの方向性が合わず退所を決断、子どもの希望で退所するなどして同居を再開する場合も散見され、ケアを他者へ託すことの難しさについても語られた。望む暮らしぶりがあるが、暮らしの場が見つかることを優先するならば“仕方ない所への入所もいとわない”という声もあった。

なかなか移行できないなか、第三者からは、早く預けた方がいい、子どもの自立のために暮らしの場の移行を、一人暮らしを、と言われるも、“わかっている”けれどもできないのである。また、暮らしの場の相談に行った時点で「親が元気」と判断されると相談の話にまで至らなかったということも語られた。

先行きが不透明で不安な気持ちもありながら「あと10年がんばるか」「85歳くらいまでなら（同居でのケアが）大丈夫」と、同居のケアを続ける気持ちが語られるが、親自身が他界することを語る時に、“その時は子どもがどうなっても仕方ない”との思いも持つ。“子どもと一緒にいたい”気持ちと、“親亡き後を考えないといけない”気持ちや、（同居のケアを）“いつまでやらなければならないのか”と語った後に、“何とかなる”という行きつ戻りつする思いを語り、“ゆらぐ気持ち”がみられ、“どうしたらよいかわからない”と異口同音に語る。

## 5. 考察

暮らしの場を移行したいと考えて、行動に移しても暮らしの場の社会資源の量や質が不足しており、親の考えたタイミングで移行できず、高齢期の親の“がんばる”という思いに頼ることになり、同居生活が継続し、長期化していく実態があった。

暮らしの場の相談に行った時点で「親が元気」と判断されると相談に至らなかった経験も語られた。相談を聞く側が、親が元気なうちは親のケアを前提にしていることがうかがえ、このようなまなざしの前では、親は移行の時期の判断が難しくなり、“ゆらぐ気持ち”が生まれることで親子同居でのケアの閾値を上げざるを得ないのではないだろうか。それは、本来その親が持っていた閾値より高くなるだろう。本来持っていた閾値を超え、移行の見通しが立たない高齢期の親が、自身が他界することを語る時に、“その時は子どもがどうなっても仕方ない”という極端な思いとなるのではないかと考える。